

# グラント文字

高島 淳

グラント (grantha) 文字は、南インドにおいてきわめて重要な文字であるが、インドを専門とする人でも知らないのが普通である。ところが、東南アジアを専門とする人は名前だけは知っていて、「グラント文字が東南アジアのいろんな文字の起源ですよ」と簡単に口にする。

グラント文字で印刷されたテキストを日常扱っている私のようなものにとっては、「ちょっと待ってくださいよ」と言いたくなる発言である。グラント文字は現役の文字であり、東南アジアの文字の起源となった 10 世紀以前の文字からは大きく変化しているものだからである。

そもそも「グラント」というのは、「結ぶ」という動詞に由来して、規則に従って配置された語、「詩節」「作品」を意味するサンスクリット語である（通俗的には貝葉の束を紐でまとめるところから「本」を意味すると理解されている）。これから転じて、南インドのタミル・ナードを中心とする地方で、現地のタミル語ではなくサンスクリット語を表記するための文字をグラント文字と呼ぶこととなった。

最近ではタミル・ナード州でも、ナーガリー文字に押されて、使用する人の数はごく少なくなったが、30 年くらい前まではタミル・ナードのパラモンはグラント文字だけをサンスクリットのテキストの読み書きに使うのが当たり前であった。今でも、50 代くらい以上のパラモンでグラント文字しか読めない人も多い。そのため、20 世紀の前半には、特にシヴァ教の文献を中心とするテキストが、グラント文字で数多く印刷・出版されている。

ヨーロッパでも、最初期のサンスクリット語教科書の一つはグラント文字を用いて書かれている。1790 年の Bartholomaeo の「サンスクリット文法」という本が、ラテン語とグラント文字で書かれている。この本を見た人が、グラント文字こそサンスクリットにふさわしいと、グラント文字を印刷できるソフトを探しているのをネットワーク上で発見して、私も驚いた次第である。

さてまずグラント文字とはどういう文字であるのか、タミル文字と比較しながら見てみよう。





*gurossvārtham* ഗുരോസ്സവൃത്തം (「グル自らのために」) のように 3 段重ねもある。結合文字の中で多用される *y* と *r* については、 $\overset{\curvearrowright}{y}$  (子音群の後に来る *y*) と  $\overset{\curvearrowleft}{r}$  (子音群の前に来る *r*、ただし位置的には最後に来る) と  $\overset{\curvearrowright}{r}$  (子音群の後に来る *r*) という半字形がある。たとえば、*svātantrya* സ്വാതന്ത്ര്യ (「独立自存」) などである。また、下付文字の結合形も、*pañcatattvamantra* പഞ്ചതത്വമന്ത്ര (「5 原理のマントラ」) のような形で用いられる。おなじ *tr* の結合でも *astra* അস্ত്ര (「武器」) のように、結合形の下付文字になる場合もある。

私の知る限りで、通常のサンスクリット語での最大の子音結合を含む語である *kārtsnya* കർത്ത്യ (「全体」) と表記される。t と n と m だけは、通常のハラント記号  $\text{𑌌}$  によって母音のない状態を示すのではなく、独立した単独子音形  $t \text{ 𑌌 } n \text{ 𑌌 } m \text{ 𑌌}$  を持っているからである。

このように生きて使われているグラント文字を見慣れている目からは、「グラント文字が東南アジアの文字の起源」という言明は、とんでもない間違いと言いたくなる。なぜなら、梵字 (悉曇) はナーガリー文字に由来しているというようなものだからである。しかし、「タミル・ナードにおいてサンスクリット語を書くために用いられる文字」とグラント文字を定義すると、4~5 世紀以前のブラーフミー文字をのぞいたものがこの定義に当てはまるので、現在に至るまでの字形の変遷を無視して、6~7 世紀頃のパッラヴァ朝の文字も単純にグラント文字と呼ぶことも多い。だが、正確を期すならば、パッラヴァ文字あるいはパッラヴァ・グラント文字が東南アジアの文字の起源となったと言う方が遙かに好ましいのである。

以上のグラント文字の表記に用いたのは、今回私が Metafont で開発したグラント文字フォント\*1 であるが、私の知る限り、グラント文字のコンピュータフォントは世界中で誰も開発していないので、これが一般の書籍に載る初めてのグラント文字のコンピュータフォントということになる。

---

\*1 これは、平成 11~12 年度文部省科学研究費補助金特定領域研究 (A)(2) 「古典学のための多言語文書処理システムの開発」の成果の一部である